

地域と学ぶ

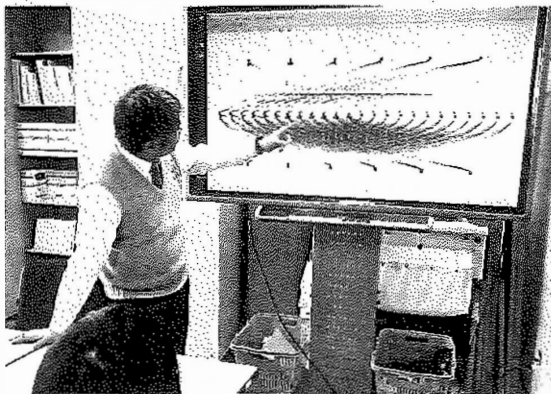
山形大学地域教育文化学部

山形大に着任してから、かれこれ18年。2014年からは大学院教育実践研究科を担当しています。学んでいる院生の半数が現職の教員である教職大学院です。彼らは、ここで地域を担う明日のスクール・リーダーとなるべく理論と実践の間を相互横断的に学んでいます。

指導に当たるわれわれスタッフも研究者教員と実務家教員に分かれています。(私は研究者教員です)、授業も理論的な内容から実践的な内容まで多岐にわたります。さらに院生は1年次に6週間、2年次に4週間の計10週間も教育実習を行います。まさに理論と実践を相互横断的に学ぶカリキュラムとなっています。

英語科教育 石崎 貴士 准教授

▽1968年生まれ、茨城県出身。山形大着任は99年。2014年から教育実践研究科(教職大学院)所属。



シミュレーターを舌用した石崎貴士准教授のゼミ

言語を学ぶプロセス探る

私の専門は「英語科教育」です。実際の脳の働きと比べますが、今、取り組んでいる研究はコンピュータを活用した学習シミュレーション(「コネクショニズム」といいます)です。コンピュータ上に人間の脳細胞のネットワークを再現して、それに学習をさせることで、人が言語を学んでいくプロセスを探る研究領域です。実際の脳の働きと比べると、かなり単純化したモデルなのですが、それでも私たちの学びのシステムについては未知の部分が多いため、シミュレーションで得られた知見が人間の学びについて考える上で有意義な示唆を与えてくれます。現在も私の研究室に所属する学部生と一緒に、シミュレーターを用いて母語や第2言語習得のシミュレーションを行っています。その一方で教育実践研究科の教員として、院生たちが実習している様子を見るために地域の中学校を訪問させていただいております。実習校での授業を拝見すると、シミュレーションで得られた知見が実際の子ど

もたちの様子から再確認できて納得させられるところもあるのですが、それと同時に子どもたちが、関わり合いの中から学び合う姿も見られ、シミュレーションで見ているような個人の学びからは得られないような学びの姿がそこにあつて、とても刺激になっています。理論と実践。私自身も院生とともに相互横断的に学ぶ日々が続いています。

11月1回掲載します